研究ノート

ファーストステップとしての模擬保育の考察
―保育内容総論における「手遊び模擬保育」の分析を通して―

上　月　智　晴
（児童学科）

本研究では、特に学生が初めての模擬保育を体験する時の保育者役の課題内容について、「保育内容総論」の中で行った「手遊び模擬保育」における学生の気づきを検討することを通して考察した。短い活動であるが、「手遊び」に特化した「模擬保育」において、多くの学生の気づきが促された。その要因として、学生全員が繰り返し保育者役を経験できたこと、動画を活用しての振り返りを丁寧に行ったこと、手遊びを模擬保育として行うにあたってのシチュエーションの工夫による効果が考えられたが、初めて経験する模擬保育における「手遊び模擬保育」の有用性が示唆された。

キーワード：模擬保育，手遊び，保育者役，保育内容総論，振り返りレポート

1．研究の目的

従来から、幼稚園教諭・保育士を養成する大学・短期大学において、学生の学修意欲や保育実践力の向上、理論と実践の融合等を目的に、実習事前事後指導や演習・実技系教科目等で模擬保育が取り入れられてきたが、2017年に新しい教職課程が策定されたことによってその導入が一層進んでいる。幼稚園教諭養成課程のコアカリキュラムである「保育内容指導法」では、学生が修得すべき資質能力として、一般目標に「幼児の発達や学びの過程を理解し、具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身に付ける」ことが、そして、その到達目標の１つに「模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている」ことが求められることとなり、保育内容指導法（健康・人間関係・環境・言葉・表現・保育内容総論）において模擬保育の実施が必須となった。また、2020年２月以降、新型コロナウィルス感染症の拡大に伴い、多くの大学等で教育実習・保育実習が実施できない事態が発生し、その代替策としての模擬保育も近年行われている。今、保育者養成大学において模擬保育が行われる機会が増えている。

模擬保育の意義や有用性については、すでに多くの先行研究によって明らかにされているが、効果的な模擬保育を行うにあたっては、その実施科目の目的・目標の達成だけでなく、学生の学修段階等を踏まえた課題を設定することが重要である。田爪・小泉（2006）によれば、模擬保育を経験することによって、学生の「保育者アイデンティティ」を確立させることに一定の効果がある一方、保育実践に対する基礎的認識が不十分なまま模擬保育を行うことが「保育者アイデンティティ」の拡散を助長する可能性があることも示唆されている[1)]。模擬保育は通常、保育者役、子ども役、観察者役の３役を立てて行うことが多いが、「保育者アイデンティティ」の拡散は、保育者役をどのように経験するのかによって生じるものと考えられる。保育者役を経験することによって保育に対する自信や喜びを感じることができれば「保育者アイデンティティ」は確立に向かうが、逆にそれを感じられなかった場合は拡散方向に向かうだろう。

久富・須藤（2022）によれば、模擬保育を行う際の保育場面や対象年齢、活動内容、時間、

グループ単位か個人で行うのか等については、授業担当教員から指示されることが多く、そのバリエーションも多様[2)3)],であるとされる。当然、模擬保育を実施する教科目の目的・目標によって、保育者役の課題設定は様々であってよい。しかしながら、学生が初めての模擬保育を体験する場合には、特に、保育者役の課題設定についてよく検討する必要がある。

本研究においては、2021 年度「保育内容総論」（4 年制大学・2 年次前期開講科目）で、学生が大学入学後、初めて経験した模擬保育の検討を行う。この年度は、新型コロナウィルス感染拡大に伴う緊急事態宣言・まん延防止等重点措置が繰り返し発令され、前年度同様、授業計画の大幅な変更が余儀なくされた年である。授業回のほとんどを対面からオンラインに変更し、まん延防止等重点措置が解除された授業回の終盤で何とか対面で簡易的な模擬保育を実施することができた。

この簡易的な模擬保育は「手遊び」に特化した模擬保育であったが、教員の予想以上に学生が意欲的に取り組む姿や振り返りレポートでの豊かな気づきが見られた。上月（2018）は、2017 年度の同科目において実施した模擬保育と学生の気づきを検討[4)]した。この時の模擬保育は「朝の会」から「主活動」までの 35~50 分程度の課題に取り組んだものであるが、それとの比較検討も行いながら、「手遊び模擬保育」の有用性、ファーストステップとしての模擬保育課題について考察したい。

２．2021 年度「保育内容総論」の授業概要と模擬保育の内容

(1) 授業概要

2021 年度の当該科目の受講生は 109 名で、3 クラスに分け授業を行った（1 クラス 36～37 名、すべて筆者が担当）。教職課程コアカリキュラムであることから、2019 年度入学生からは文科省が示す全体目標、一般目標、到達目標を踏まえた内容のシラバスを作成している。到達目標は、「幼児期に育みたい資質・能力と保育内容 5 領域のねらい及び内容との関連を理解することができる」「幼児の遊びを通しての総合的な学びを理解し、主体的・対話的で深い学びを実現する保育が構想できるようになる」「模擬保育を通して、園生活の具体的な場面に即した指導計画の作成、展開、評価の仕方を理解することができる」の 3 つで、授業の序盤（第 1 ～ 6 回）でこの科目を学ぶ意義や 5 領域の考え方、生活や遊びを通して総合的に行われる指導、幼児教育における評価、幼児期に育みたい資質・能力等を理解した後、授業中盤（第 7 ～10 回）で指導案の作成の仕方を学び（授業終盤で行う模擬保育の計画・準備を関連付けて）、授業終盤（第 11 ～15 回）に、模擬保育の実施、振り返り、まとめを行うという流れになっている。

しかしながら、先述の通り、2021 年度の「保育内容総論」は、新型コロナウィルス感染拡大に伴う緊急事態宣言・まん延防止等重点措置が繰り返し発令される状況であったことから、15 回授業のほとんどをオンライン（オンデマンド動画配信や LMS 課題提供による授業）に切り替え、授業内容も若干の変更を加えた。

模擬保育については、シラバスの到達目標に、「模擬保育を通して、園生活の具体的な場面に即した指導計画の作成等を理解する」ことを掲げていたことから、その具体的な場面として、「運動遊びの場面」と「製作遊びの場面」を 1 回ずつ主活動として取り上げ、それぞれその活動の前後に、導入となる手遊びや歌、絵本等を組み合わせた複合的な構成を課題に考えていたが、模擬保育を実施する回までに学生が集まってグループで相談・準備する時間が取れないことや、模擬保育を実施する回においても、感染防止対策の徹底から、消毒・換気時間を授業時間内に設け、時間短縮授業を行う必要があったことから、予定通りの模擬保育を行うことができないと考え、簡易的な模擬保育として、手遊びに特化した模擬保育を行うことに変更した。

手遊びは、特別な準備物や道具が必要なく、消毒作業の負担を軽減できること、また、場所を問わずどこでもできる遊び、少人数でも楽しめる遊びなので、密を避けるために多人数の学生を適当な場所に分散させての実施も容易であ

ること、さらに、手遊びは短時間で終えることができるので、授業前後の換気時間の確保もしやすいこと等、都合がよいと考えた。

しかし、手遊びを模擬保育の課題として選んだ理由は感染防止対策上の理由だけではない。手遊びを行うことによる教育的効果、有用性をも考えてのことである。手遊びは、いつでも、どこでも、特別な道具も必要なく、保育者の身体ひとつあればできる手軽さがある。しかし、だからこそ、保育者の指導力が問われるといってよい。何のツールにも頼らず、保育者自身の言葉かけと歌声と身体表現のみで、子どもたちと楽しい時間を創り出す力が求められる。手遊びは他の活動の導入に用いられることが多いとされる（吉田・奥田;2008[5]、永津;2021[6]）が、手遊び自体が楽しくなければ、管理・指示・統制的な活動と化し、退屈なものになってしまう。短い時間の中でも、子どもがやってみたいと思える導入、繰り返し楽しみたい、もっと発展させたいと思える展開、心地よい終え方、子どもの気持ちに即した活動の流れがなければ、楽しいものにならない。これはまさに「保育を構想する力」の基礎であり、そのようなエッセンスが凝縮された手遊びの指導経験を積むことは、学生の保育者としての力量を高めていくものと考える。また、手遊びの一斉活動としての実践は、自由遊びにおける保育者の援助方法の修練という見方もあり、その有効性が示唆されている（岩田・小川;2015）[7]。手遊びは、5領域の側面から見ても総合的な育ちを促すことのできる豊かさをもった遊びである（高原 2008[8]、今・尾辻 2020[8]）。「保育内容総論」で扱う内容としてもふさわしいと考えた。

「手遊び模擬保育」は、文字通り、手遊びを行う模擬保育であるが、単に人前で手遊びを発表するということではない。「模擬保育」である以上、目の前の人（学生）を本当の子どもだと思って実践する。また、その子どもも漠然とした子どもではなく、特定の年齢、シチュエーションを設定して行う。短時間ではあるが、原則として、あらかじめ「指導案」を立てて行う。

(2) 「手遊び模擬保育」の具体的な課題内容

「手遊び模擬保育」は13回目と14回目の授業で行った。具体的な課題内容は表1の通りである。各回、対象年齢、場面を設定したが、手遊びは、教員が指定した3つの手遊び教材の中から選択させた。各回に行う手遊び教材の選択をまったくの自由にしなかった理由は、一つ一つの手遊びの教材としての豊かさ、奥深さ、指導方法の工夫等について丁寧に検討させたいと考えたからである。同じ手遊びでも、対象年齢やシチュエーションによってねらいも変わってくること、また、多様な楽しみ方・アレンジがあること、さらには、同じ手遊びを同じように行っていても、それをする人によって楽しく感じたり、そうでなかったりすることがあり、それらについて、学生に比較考察させたいと考えた。それは「模擬保育とその振り返りを通して保育の改善点を見つける」ことに通ずると考えた。

1回目の模擬保育では3歳児クラスに対して

表1 「手遊び模擬保育」の具体的な課題内容

	模擬保育1回目	模擬保育2回目
対象年齢	3歳児クラス（クラス名「こぐま組」）	5歳児クラス（クラス名「ぞう組」）
場面	朝の会の開始時（出席確認をする前）	誕生会（保育者からのお楽しみの出し物として）
選択教材	「むすんでひらいて」 「ぱんだうさぎこあら」 「おやつたーべよ」	「幸せなら手をたたこう」 「おちたおちた」 「かみなりドンがやってきた」
時間	3分以上	4分以上
指導案作成	任意	必須
子どもの姿	子どもの人数は10～11名。クラスの子どもたちは上記の手遊びを知らないという想定で、指導を考える。	

3 分以上、2 回目の模擬保育では 5 歳児クラスに対して 4 分以上の時間を使っての保育を考える内容を課した。いずれの想定クラスの子どもたちも、学生が行う手遊び教材を知らないという前提で、手遊びの指導を考え、実践することを課題とした。これらは学生が少しでも子どもの立場にたって指導の流れを考えるために大事な状況設定と考えた。

学生は 2 回の模擬保育いずれにおいても、全員が保育者役を 1 人で経験するが、学生にとって初めての経験である今回は、1 回目の模擬保育については指導案や細案の作成を任意とした。指導案を書かなくても手遊びの実践ができると思った学生には、まずは指導案を書かずに実践させ、次に指導案を立てて行った時との違いを考えさせた。

「手遊び模擬保育」の趣旨や課題内容の説明を第 12 回目の授業で行った。その際、学生への「手遊び模擬保育」の動機づけ（アイスブレーキングを兼ねて）として、数年前の同授業において、教員（筆者）が保育者役となって子ども役に見立てた学生を相手に行った手遊び模擬保育の録画を見せ、その時に作成した指導案と細案を解説し、模擬保育のイメージをつかませた。

(3) 「手遊び模擬保育」の実施方法

「手遊び模擬保育」当日は、密を避けるために、複数の教室を使用して、1 クラスの人数を 3 グループ（1 グループ 11，12 名）に分け、全グループ同時進行で模擬保育を行った。また、飛沫感染防止のため、マスク着用の上、発声は控えめにするとともに、保育者役と子ども役との対面距離は約 5 メートルの間隔を開け、子ども役は扇形に横一列で並び、隣との間隔は約 1 メートルを取って座った。各グループ、順番に 1 人ずつ保育者役を行い、その他の学生は子ども役で参加し、今回は観察役を置かなかった。

学生には模擬保育では子ども役が大事であることを伝え、想定された年齢の子どもになることを（もちろん限界があることは承知の上で）、そのために、授業前に教員から簡単にその年齢の特徴等を助言した。

教員は模擬保育中、各グループを巡回するが、模擬保育中にコメントはせず、模擬保育終了後の残り時間で簡単なコメントを述べた。また、3 会場に分かれて同時並行で行った模擬保育の様子は、教員自身の授業の反省と、学生が模擬保育後の振り返りに活用できるように 3 台のビデオカメラで同時撮影した（模擬保育後 3 日間、Microsoft Stream にて録画映像を授業履修者のみが視聴できるように配信）。

各回、模擬保育終了後 3 日以内に LMS から模擬保育の振り返り（反省、課題、気づき、感想）を提出させた（ウェブ入力で文字数は自由）。この振り返りは、自由記述形式で、あえて評価項目等を作らなかった。評価項目や評定を用いることで模擬保育の客観視はしやすくなるが、初めての模擬保育においては、まず「保育を改善する視点」として何が大切なのかを振り返りの中で見つけ出していく作業が重要であると考えたからである（上月 2018）。

通常は、個人での振り返りの後、グループ、クラス全体での振り返りの交流を行うが、この年は感染防止対策のため、対面授業を実施するにしても極力対面時間を減らす必要があったことから、個人での振り返りのみに留めた。クラス全体での振り返りができなかったかわりに、最終授業回で、教員が学生の振り返りの講評・フィードバックを行った（オンデマンド動画で配信）。

3.「手遊び模擬保育」における学生の気づきの考察

(1) 分析方法

ここからは、「手遊び模擬保育」実施後に学生が提出した振り返り（ウェブ上での入力であるが、以下「振り返りレポート」とする）をもとに、模擬保育後に学生がどのような観点から振り返りを行っていたのか、以下の視点から分析を行っていく。

＜振り返りレポートの分析の視点＞

1. 事前準備・事前練習全般等に関すること
2. ねらい・内容の設定に関すること
3. 活動の流れと時間配分に関すること

4. 環境構成に関すること（物的・空間的）
5. 環境構成に関すること（人的）
6. 子どもの姿の予想に関すること
7. 保育者の援助、言葉かけに関すること

この分析の視点は、上月（2018）において検討した模擬保育と同様のものであるが、それとの比較検討も行うことから、今回の「手遊び模擬保育」との違いを確認しておく。

上月（2018）で検討した対象は、学生にとって初めての模擬保育という点と、授業の中で行った2回分の模擬保育での気づきという点では共通しているが、模擬保育の課題内容やその振り返り方に違いがある。上月（2018）で対象とした模擬保育は、「朝の会」（手遊び・歌・挨拶・出席確認等を含む）から「主活動」（運動遊びか製作遊びのどちらかを設定保育として行う）までの35~50分程度の模擬保育（複数の活動を組み合わせての模擬保育であることから、以下本稿では「複合型模擬保育」とする）で、保育者役・子ども役・観察役の3役を立てて実施したが、保育者役については一部の学生のみの経験（3～4名のグループ）である。また、分析には、模擬保育直後に書いた個人での振り返りレポートと、その後、クラス全体で振り返りを交流した後に提出されたレポートをもと行った。後者の振り返りでより豊かな学生の気づきが見られたが、本研究においては、今回の「手遊び模擬保育」の分析対象が模擬保育直後の個人での振り返りレポートであることから、ここでは前者の個人での振り返りレポートのみを比較対象とする。

なお、今回の「手遊び模擬保育」の振り返りレポートは、任意に選んだ1クラスの2回分の66件（2回通しで出席した学生のもの）を分析する。学生の振り返りレポートに記載されていた文字量は、1件当たりの平均は573文字、最多で1,286文字、最少で48文字である。

(2) 「手遊び模擬保育」の学生の気づき

表2-1は、「手遊び模擬保育」実施後の振り返りレポートに見られた学生の気づきを示したものである。66件の振り返りレポートに記載されていた気づきを見ると、最も記述の多かった観点は、「保育者の援助、言葉かけに関すること」で61件（92.4%）、次いで「活動の流れと時間配分に関すること」50件（75.8%）、そして、「環境構成に関すること（人的）」41件（62.1%）、「子どもの姿の予想・理解に関すること」34件（51.5%）、「事前準備・事前練習全般に関すること」29（43.9%）、「ねらいと内容の設定に関すること」21（31.8%）「環境構成に関すること（物的・空間的）」14件（21.2%）と続いた。1回目と2回目の「手遊び模擬保育」を比較すると、「ねらいと内容の設定に関すること」以外は、件数・割合に若干の差異（2,3件・6~9%程度）が見られるが、学生の気づき具合はほぼ同程度である。

振り返りレポートには、自分が行った模擬保育に対する記述と、他学生が行った模擬保育に対する記述が見られるが、その別を示したものが表2-2である。いずれの観点も、前者の方が

表2-1 「手遊び模擬保育」後の振り返りレポートに見られた学生の気づき

振り返りの観点	全2回（N＝66）		1回目（N＝33）		2回目（N＝33）	
	件数	割合	件数	割合	件数	割合
事前準備・事前練習全般に関すること	29	43.9%	16	48.5%	13	39.4%
ねらいと内容の設定に関すること	21	31.8%	5	15.2%	16	48.5%
活動の流れと時間配分に関すること	50	75.8%	26	78.8%	24	72.7%
環境構成に関すること（物的・空間的）	14	21.2%	8	24.2%	6	18.2%
環境構成に関すること（人的）	41	62.1%	22	66.7%	19	57.6%
子どもの姿の予想・理解に関すること	34	51.5%	18	54.5%	16	48.5%
保育者の援助、言葉かけに関すること	61	92.4%	31	93.9%	30	90.9%

後者よりも記述の割合が高いが、「活動の流れと時間配分に関すること」については、他学生が行った模擬保育に対する記述が比較的多く見られる（42.4%）。また、自分が行った模擬保育に対する記述の中でも、「ねらいと内容の設定に関すること」については、１回目よりも２回目の割合が高い。

(3)「手遊び模擬保育」と「複合型模擬保育」の比較

「手遊び模擬保育」と「複合型模擬保育」の振り返りレポートの気づきを比較したものが表3-1である。カイ二乗検定を行ったところ、「保育者の援助、言葉かけに関すること」以外は、すべて有意な差があった。表3-2は「複合型模擬保育」の内「保育者役を経験した学生群」の振り返りレポートの気づきに絞って見た場合の比較であるが、これを見ると「環境構成に関すること（人的）」、「環境構成に関すること（物的・空間的）」については有意差が、「ねらいと内容の設定に関すること」、「活動の流れと時間的配分に関すること」についてはゆるやかな有意差があった。概して、「手遊び模擬保育」の方が「複合型模擬保育」よりも気づきが多いことが伺える。

以下、「手遊び模擬保育」後に提出された学生の振り返りレポートの記述を見ながら、具体的な学生の気づき内容、及びその気づきが促された要因を考察していく。

表2-2　「手遊び模擬保育」後の振り返りレポートに見られた学生の気づき（振り返りの対象別）

振り返りの観点	実施回	N	自分が行った模擬保育に対する記述		他学生が行った模擬保育に対する記述	
			件数	割合	件数	割合
事前準備・事前練習全般に関すること	**全2回**	**66**	**29**	**43.9%**	**0**	**0.0%**
	1回目	33	16	48.5%	0	0.0%
	2回目	33	13	39.4%	0	0.0%
ねらいと内容の設定に関すること	**全2回**	**66**	**18**	**27.3%**	**5**	**7.6%**
	1回目	33	4	12.1%	1	3.0%
	2回目	33	14	42.4%	4	12.1%
活動の流れと時間配分に関すること	**全2回**	**66**	**36**	**54.5%**	**28**	**42.4%**
	1回目	33	21	63.6%	14	42.4%
	2回目	33	15	45.5%	14	42.4%
環境構成に関すること（物的・空間的）	**全2回**	**66**	**9**	**13.6%**	**6**	**9.1%**
	1回目	33	6	18.2%	2	6.1%
	2回目	33	3	9.1%	4	12.1%
環境構成に関すること（人的）	**全2回**	**66**	**36**	**54.5%**	**11**	**16.7%**
	1回目	33	21	63.6%	6	18.2%
	2回目	33	15	45.5%	5	15.2%
子どもの姿の予想・理解に関すること	**全2回**	**66**	**31**	**47.0%**	**4**	**6.1%**
	1回目	33	17	51.5%	2	6.1%
	2回目	33	14	42.4%	2	6.1%
保育者の援助、言葉かけに関すること	**全2回**	**66**	**58**	**87.9%**	**18**	**27.3%**
	1回目	33	30	90.9%	8	24.2%
	2回目	33	28	84.8%	10	30.3%

表 3-1「手遊び模擬保育」と「複合型模擬保育」後の振り返りレポートに見られた学生の気づきの比較

振り返りの観点	「手遊び模擬保育」（N＝66）		「複合型模擬保育」（N＝198）		χ二乗検定
	件数	割合	件数	割合	
事前準備・事前練習全般に関すること	29	43.9%	44	22.2%	x2(1)= 10.609 , p<.01
ねらいと内容の設定に関すること	21	31.8%	23	11.6%	x2(1)= 13.127 , p<.01
活動の流れと時間配分に関すること	50	75.8%	82	41.4%	x2(1)= 22.000 , p<.01
環境構成に関すること（物的・空間的）	14	21.2%	104	52.5%	x2(1)= 18.389 , p<.01
環境構成に関すること（人的）	41	62.1%	60	30.3%	x2(1)= 19.890 , p<.01
子どもの姿の予想・理解に関すること	34	51.5%	43	21.7%	x2(1)= 19.856 , p<.01
保育者の援助、言葉かけに関すること	61	92.4%	190	96.0%	x2(1)= 0.674 , ns

表 3-2「手遊び模擬保育」と「複合型模擬保育（保育者役経験群）」後の振り返りレポートに見られた学生の気づきの比較

振り返りの観点	「手遊び模擬保育」（N＝66）		「複合型模擬保育」保育者役経験群（N＝21）		χ二乗検定
	件数	割合	件数	%	
事前準備・事前練習全般に関すること	29	43.9%	10	47.6%	x2(1)= 0.002 , ns
ねらいと内容の設定に関すること	21	31.8%	1	4.8%	x2(1)= 4.824 , p<.05
活動の流れと時間配分に関すること	50	75.8%	10	47.6%	x2(1)= 4.652 , p<.05
環境構成に関すること（物的・空間的）	14	21.2%	14	66.7%	x2(1)= 13.070 , p<.01
環境構成に関すること（人的）	41	62.1%	3	14.3%	x2(1)= 12.733 , p<.01
子どもの姿の予想・理解に関すること	34	51.5%	10	47.6%	x2(1)= 0.004 , ns
保育者の援助、言葉かけに関すること	61	92.4%	20	95.2%	x2(1)= 0.003 , ns

（4）「手遊び模擬保育」における学生の気づきの詳細

1）保育者の援助、言葉かけに関すること

学生の気づきで最も多かったものは「保育者の援助、言葉かけに関すること」で、92.4%のレポートにおいてこの観点からの記述が見られた。この多さは「複合型模擬保育」でも 96.0%と同様の高割合であった。「保育者の援助、言葉かけに関すること」は、直接的な子どもへの行為であり、学生にとって見えやすく、気づきやすい観点と考えられる。

振り返りレポート（表 4-1）を見ると、自分自身の模擬保育について、緊張のあまり子ども役の学生に丁寧に関わることやコミュニケーションを取ることができなかった反省（記述例 A・B）や、他学生が行った模擬保育を子ども役として受けて、子どもの発言に注意を向けることや子どもの反応を引き出すような工夫の大切さへの気づき（記述例 C・D）が記されている。また、模擬保育の録画を事後に視聴することで、模擬保育時に気づかなかった援助の不十分さ、子どもの言葉の聞き落としに気づいている例（記述例 E・F）もある。「保育者の援助、言葉かけに関すること」の振り返りは、1 回目のレポートでは、自分自身の模擬保育に対しての不十分さ（課題）について記しているものがほとんどであるが、2 回目のレポートでは、1 回目の模擬保育の反省を生かしての手ごたえを感じて

いる記述が多く見られた（記述例 G・H）。

2）活動の流れと時間的配分に関すること

学生の気づきで次に多かったものは「活動の流れと時間的配分に関すること」で、75.8％のレポートにおいてこの観点からの記述が見られた。この観点からの振り返りは「複合型模擬保育」(41.4%）との比較でみると、有意に「手遊び模擬保育」で高い。手遊びに特化した模擬保育であるにも関わらず、複数の活動を課題に取り組んだ「複合型模擬保育」よりも、この観点での振り返りを行っている学生が多かったことは意外であった。

振り返りレポート（表 4-2）を見ると、特に手遊びの最初の導入の仕方・工夫に関する気づき（記述例 A・B）がよく見られたが、展開部分での工夫や、自然な流れをつくることの大事さや時間配分への意識（記述例 C・D・E・F)、手遊びの後の活動とのつながりを考えることの大切さへの気づき（記述例 G）も見られる。

こうした気づきは、今回の模擬保育の課題が単に手遊びを人前で発表するという内容ではなく、学生がする手遊びを子どもが知らないという想定や、３～4 分以上という時間を使うことを設定したことで、学生なりに活動の流れ、時間の使い方を考える意識が高まったと考える。また、「活動の流れと時間配分に関すること」への気づきは、上述したが、他の観点と比較して他学生の模擬保育に対する記述が多かった（42.4%)。今回同じ手遊び課題を学生が共通に取り組んだことも、他学生の様々な工夫への気づきを促したと考える。

3）環境構成に関すること（人的）

学生の気づきで３番目に多かったものは「環境構成に関すること（人的)」で、62.1％のレポートにおいてこの観点からの記述が見られた。この観点からの振り返りは「複合型模擬保育」（30.3%)、「複合型模擬保育（保育者経験群)」（14.3%）との比較でみると、いずれも有意に「手遊び模擬保育」で高かったが、特に後者の方でその差が大きい。

振り返りレポート（表 4-3）を見ると、手遊びを楽しく感じられる要素として、体の動かし方（記述例 A・C・D・E)、笑顔や豊かな表情（記述例 B・C・E)、声の出し方（記述例 B・D・E）の大切さに気づいている様子が伺える。

こうした気づきは、今回の模擬保育の課題が手遊びという何の道具も使わない、保育者の身体のみで行われる活動であったということが「環境構成に関すること（人的)」への気づきを促した要因であると考えられる。また、コロナ禍でマスクを着用しながらの模擬保育であったことも、より表情や声への意識を高めたと考える。しかし、このような保育者の動き、表情、声については、保育者役をしている学生自身は自分で気づきにくいものである。「複合型模擬保育」においても保育者役を経験している人のレポートにはあまりこの点の反省は見られなかった。このような気づきを促した要因は、今回、ICT を活用して一定期間ウェブ上で個人で繰り返し録画を視聴、振り返りに活かすことができたことも大きいと考える。

4）子どもの姿の予想・理解に関すること

学生の気づきで４番目に多かった観点は「子どもの姿の予想・理解に関すること」で、51.5%のレポートにおいてこの観点からの記述が見られた。この観点からの振り返りは「複合型模擬保育」（21.7%）と比較して有意に高いが、「複合型模擬保育（保育者経験群)」(47.6%）との比較では有意差がない。

振り返りレポート（表 4-4）には、模擬保育の想定場面である朝の会における子どもの姿を予想して留意点を考えていたもの（記述例 A)、指導案を立てる際に子どもの姿を予想すること（記述例 B・C)、予想した子どもの姿についてのズレを反省するもの（記述例 C)、またズレが起こったときの柔軟な対応の重要性(記述例 D）に対しての気づきが見られた。

こうした気づきは、「複合型模擬保育（保育者経験群)」との比較で有意差が無かったことから、保育者役を経験するからこそ感じやすい点であると考える。「手遊び模擬保育」での保育者役と

表4-1 「保育者の援助、言葉かけに関すること」の記述例

A	・手遊び模擬保育をしてみて、10人くらいの前でもやっぱり緊張してしまい、話し方が早くなってしまったことと、自分が予想していなかった子どもの発言に対して焦ってしまい、**丁寧に関わること**が出来なかったのが反省点であると思いました。（1回目）
B	・3分間の手遊び模擬保育を行ってみて、初めて十数人の前で模擬保育をしたので、想像以上に緊張してしまい、**自分の考えていた子どもとのコミュニケーション**がとれませんでした。（1回目）
C	・同じ手遊びを選んだ方でも、**子どもとのコミュニケーションを多く**取っている人や、**子どもの発言にも注意を向け**られている方がいて、見習いたいと思いました。（2回目）
D	・他の学生の手遊び発表では、こちら（子ども役の学生）への**語りかけ**を大切にされていたり、こちら側の**反応を引き出すような言葉かけ**の工夫を考えられたりしていたので、ぜひ参考にしようと思います。（1回目）
E	・手遊びは終始私主体で展開されていき、**子ども役の学生一人一人に応じた言葉かけ**や**発達に合わせた援助**が大切になされていなかったことに後から（映像を見て）気づきました。（1回目）
F	・自分の計画通りに進めようとするあまりに、**子どもの言葉を聞き落としている**ことが動画を視聴して多々あること に気づいた。（2回目）
G	・前回、**子どもとの応答的な関わり方**が出来なかったことが反省点だったため、今回、**子どもと会話したり、意見を取り入れたりすることを意識**したところ、予想していたよりは上手くできた。（2回目）
H	・前回よりも**みんなの反応を見ながら進めること**ができた点はよかったと思いました。緊張していると自分のペースで進めようとしてしまうので、**子どもたちの反応をよく見て、臨機応変に対応したり、言葉がけをしたり**しなければならないなと思いました。（2回目）

表4-2 「活動の流れや時間配分に関すること」の記述例

A	・**導入部分で**手遊びにもっと上手く入れるようにもう**少し工夫**したら良かったなと思いました。例えば、いきなり好きな動物に話を持っていくのではなく、動物園に行ったことに触れたり、動物の絵を描いたねなど、子どもが日常を送る中で動物に触れていることがあればそのことに関連するように話しを進める必要があると思いました。（1回目）
B	・自分は**あいさつからそのまま手遊びに移行**したのですが、**次の活動のための呼びかけや質問**をしている人がいて、子どもがより手遊びや次の活動に興味を持ちやすいと思いました。（1回目）
C	・今回の模擬保育より、**4分があっという間に感じ**るコツとして、「**導入から主活動の流れ**を自然にすること」…（中略）…総じて、子どもたちの「やりたい！」という意欲をいかに保育者が**自然な流れ**の中で引き出すかということが重要であると思った。（2回目）
D	・他の人の手遊びを実際に体験しましたが、**4分が短く感じる手遊びと、とても長く感じる手遊び**があったので、**「まだやりたい」と思ってもらえるような手遊びの流れ**を考えれるようになりたいと思いました。
E	・他の人の手遊びを見る事で、同じ手遊びでも**様々な楽しみ方やアレンジの仕方**、また着眼点の違いがあるのだと知り、とても面白かったです。（1回目）
F	・前回の「ぱんだうさぎこあら」は終わりのある歌であるが、今回の「おちたおちた」は繰り返すことを楽しむ遊びであるので、**何回繰り返して終えれば良いのか**考えることができなかった。複数の種類を挙げたのにも関わらず各1回ずつ程度しか繰り返しておらず、**時間配分**が難しいと感じた。（2回目）
G	・**手遊びをした後**に子ども達が元気よく出席のお返事ができるような声掛けをして**次の活動に繋げている**のがとても良いなと思いました。（1回目）

表4-3 「環境構成（人的環境）に関すること」の記述例

A	・保育者が全然動かないよりも、**大きく横に揺れたり**して動いていることで、視覚的にも非常に楽しむことができるのだと考えました。**体全体を大きく使う**ことが非常に大事だということを実感しました。（2回目）
B	・前回よりも子ども達の方をしっかり見つつ**ハキハキ喋り**、リラックスして**笑顔でイキイキ演技**をしている人が多く、やはり豊かな遊びを子ども達の前で行うには、大勢の前で行う事になれるという事もとても重要な要素の１つなのだと改めて感じました。（2回目）
C	・「おやつ」の手遊び模擬保育を行っていたHさんが、「せんべい」や「サクランボ」を言った後に、**恥ずかしがらず**に白目をむいて「べー」としたり、**力が抜けた時の表情**をしたりしていて、素晴らしいなと思いました。また**動作を大げさ**にやっていることで「おやつ」の手遊びの面白さがより引き出されていたので、次から私も真似してみようと思いました。（1回目）
D	・しかし動画を振り返ると保育者役である私自身が**楽しそうに見えなかった**です。保育者が楽しそうにしていないと、子ども達が遊びを楽しむことは難しいと思います。楽しそうに見えなかった原因の一つとして、**声の出し方**があると思いました。…（中略）…**弾んだ調子**で子ども達の前で話すことができるようになれば、遊びももっと盛り上がるのではないかと考えました。もう一つの原因として、私の**身振り手振りが小さいこと**を挙げます。自分ではそれなりに大きくやっていたつもりでしたが、まだまだ**大きく表現**する必要があります。（2回目）
E	・また、動画を見て驚いたのが、**笑顔で行っているつもり**でしたが、マスクをしていて、あまり楽しさが伝わってこないということです。マスクで表情が分かりにくい分、**動きを大きく**することや**声のトーンをもっと明るくして楽しい雰囲気**づくりを行うことが大切だと感じました。これから行く実習先でも、マスクは着用すると思うので、子ども達から自分はどう見えるのかを意識して、**楽しさが伝わるような振る舞い**ができるように意識しなければならないと感じました。（1回目）

表4-4 「子どもの姿の予想・理解に関すること」の記述例

A	・朝の会の出席確認の前ということで、子どもたちは元気いっぱいであったり、これから始まる一日にワクワクしていたり、逆に保護者と離れて寂しい思いをしていたりと、様々な気持ちを持った子どもがいると考えたため、全身を大きく使うことで気持ちよく朝のスタートを切りたいと考え、今回実践してみた。（1回目）
B	・改めて実際の子どもの姿を想像することの大切さに気付きました。どんな反応をするか、想像していた反応とは違った反応が来たときにどう対応するかなどをある程度想定しておかないと、沈黙になったり適当な反応をしてしまう危険性があると思いました。（1回目）
C	・手遊び模擬保育をしてみて、今回は初めての手遊びを教える設定だったのですが、子どもたちの反応を見てやり取りをしながら教えていくことの楽しさと難しさを感じました。そして、子どもたちの様子や出てくる言葉を予想しておくことが、いかに大切かを学びました。指導案を立て練習する際に予想はしていたけれど、あとから見て自分の導入部分は3歳児には難しいと感じたので、これから更に意識して予想をしていきたいと思いました。（1回目）
D	・指導案では、「このような言葉が返ってくるだろう」と想定していても、実際には、自分の予想とは異なる反応が返ってくることも少なくないはずです。このように、想定外の状況になったときに、“柔軟に対応する”ということが大切になるのではないかと感じました。（2回目）

表4-5 「事前準備・事前練習全般に関すること」の記述例

A	・大人数の前に立つことに緊張してしまい、「ぱんだうさぎこあら」の後半部分をせずに終わってしまいました。緊張してしまった原因は、練習不足であると考えます。…（中略）…次はもっと入念に何度も練習して来週に生かしたいと思います。（1回目）
B	・緊張してところどころつまづき、声かけが飛んでしまったところです。赤ちゃんのパンダとうさぎとコアラを呼ぶというところで、声を小さくして呼んでみようという部分や、次は速くやってみるよという部分などところどころ抜けてしまいました。何回も練習を重ねることが大事だと改めて感じました。（1回目）
C	・一人で手遊びをするのと、みんなの前で行うのは全然違うなと感じました。一人で練習しているときは、落ち着いてできるけど、みんなの前で行う時は、とても緊張しました。…（中略）…「動物さん来てくれたね」と言うつもりだったのに、飛んでしまいました。…（中略）…人前で話したり、歌ったりする練習をしなければならないなと思いました。（1回目）
D	・話す事を忘れてしまって何も話さずに止まってしまったことが一番の反省点です。全体の流れと、どのように説明やお話をするのかを何度も練習をして本番に挑んだのですが、人前に立って話すとなると緊張してしまい話す事を忘れてしまったので、緊張しても自然と口が動くようになるぐらいまで、何度も練習をすることが必要だと気付きました。（2回目）
E	反省点としては、緊張しすぎて手遊びの中の動作が抜けてしまったり、子どもたちに立った状態で「かみなりどんがやってきた」をやってもらおうと思っていたことを忘れてしまったりとミスも目立ちました。事前練習の際に、一人でするのではなく誰か家族に見てもらいながらすると良い緊張感があり、本番も焦らず手遊びをすることが出来るのではと思いました。次から実践していきたいと思います。（2回目）

表4-6 「環境構成に関すること（物的・空間的）に関すること」の記述例

A	同じ手遊びでも導入の仕方や、遊び方が様々でとても楽しいと感じることができました。中でも、ペープサートなどの小道具が出てきたときは、「何が始まるのだろう」というワクワク感で惹きつけられました。（1回目）
B	・同じグループで私と同じ手遊びを選んでいた人の模擬保育を見ると、手遊び歌に出てくる食べ物を紙に描いて紹介するといったように道具を用いる工夫をしていて非常にわかりやすいと思い、一つ勉強になった。（1回目）
C	・私は自分がずっと座って手遊びを繰り広げましたが、3歳児は動いて行ったりするのが好きなので立ったり座ったりする動きを取り入れて行うのはいいなと思いました。（1回目）

表4-7 「ねらいと内容の設定に関すること」の記述例

A	・同じ手遊びでもどこに注目して楽しむのか、何と関連させるのかによって内容が大きく異なることに気づきました。明日の予定に関連させる場合もあれば、その日の活動(お絵描きなど)に関連させる場合など想定される場面は多くあり、このことから、手遊びを行う際に何を目的とするのか、関連させたいことは何かを明確にすることが何よりも大切ではないかと考えました。（1回目）
B	・実際に手遊び模擬保育をして、私が考えたねらいに合った活動の内容になっていなかったと思いました。改めて、その時期の子どもの姿を的確にとらえること、その姿に合ったねらいを設定すること、そしてそのねらいに沿った活動を展開していくことの大切さを感じました。そうした基本のことをしっかりとおさえたうえで、綿密に指導案を立てていくようにしたいです。（2回目）
C	・一概にこの手遊びはこうだから、この年齢はこうだから、と決めつけずに、柔軟な思考と臨機応変に楽しい事を見つけられる感性で「今の、この子」に焦点を当て相応しいものを選び取り、一つの手遊びからも充実した時間を作れるようになりたいと思います。（2回目）

「複合型模擬保育」での保育者役で同等の気づきが得られたのは、子ども役の演技がたとえ不十分なものであったとしても、特定の子どもの年齢を想定して手遊びを行った効果が出たものと考える。

5）事前準備・事前練習全般に関すること

学生の気づきで5番目に多かったものは「事前準備・事前練習全般に関すること」で、43.9%のレポートにおいてこの観点からの記述が見られた。この観点からの振り返りは「複合型模擬保育」(22.2%）との比較でみると、有意に高かったが、「複合型模擬保育（保育者経験群)」（47.6%)との比較では有意差がなく、同程度の気づきが見られた。

振り返りレポート（表 4-5）には、大勢の前に立つことでの緊張を感じ、手遊びの歌詞や動作が飛んでしまったり、考えていた展開、アレンジを忘れてしまったりという反省がたくさん見られた（記述例 A・B・C・D・E)。よく知っているつもりの手遊びであっても、人前に立つと緊張で歌や動作が出てこないこともあるということに気づき、練習・準備をすることの大事さを痛感している様子が伺える。

この観点への振り返りを対象別に見ると、他学生が行った模擬保育に対する記述はまったく見られず、すべて、自分が行った模擬保育に対する記述であることが特徴的であるが、上記の「子どもの姿の予想・理解に関すること」と同様に、模擬保育で保育者役を経験することで気づきが促される特徴があることが読み取れる。

6）ねらいと内容の設定に関すること

学生の気づきで6番目に多かったものは「ねらいと内容の設定に関すること」で、31.8%のレポートにおいてこの観点からの記述が見られた。この観点からの振り返りは「複合型模擬保育（全体)」(11.6%)、及び「複合型模擬保育（保育者経験群)」(4.8%）と比較すると、前者で有意な差が、後者で緩やかな有意差があり、「手遊び模擬保育」での気づきの割合が高かった。

振り返りレポート（表 4-6）には、手遊びを行う目的を考えること（記述例 A）や、子どもの姿を捉えてのねらい設定の大切さ（記述例 B・C)への気づきが見られるが、こうした観点への気づきは、初めての模擬保育ではなかなか難しいことである。

「ねらいと内容の設定に関すること」への着眼は、1 回目と 2 回目の振り返りレポートで比較すると、2 回目で高くなっている（表 2-2)。このような特徴は「複合型模擬保育」でも見られたが、模擬保育の 1 回目を終えた時点での教員の講評でその重要性についてふれていることが、2 回目の意識の向上につながっているものと考えられる。

7）環境構成に関すること（物的・空間的）に関すること

学生の気づきで最も少なかったものは「環境構成に関すること（物的・空間的)」で、この観点からの記述が見られたのは 21.2%のレポートにおいてであった。これは「複合型模擬保育」（52.5%）と比較して有意に低い。

振り返りレポート（表 4-7）には、手遊びの歌詞の中に登場する食べ物や動物等を描いた絵カードやペープサートを用意した学生を見ての気づき（記述例 A・B）や手遊びを行う際の立位か座位かの効果を検討しているもの（記述例 C）等が少し見られたが、この観点への気づきの少なさは、特に道具がなくても楽しめる手遊びの模擬保育だったからであろう。

4．まとめと課題

「手遊び模擬保育」における学生の気づきを「複合型模擬保育」のそれと比較検討しながら考察してきたが、概して「手遊び模擬保育」において多様な気づきが促されていたがわかった。このような多くの気づきを促すことができたのは、いくつかの要因が考えられる。

まず、全員が保育者役を経験したことがあるだろう。もちろん、「複合型模擬保育」においても保育者役を経験しなかった学生も、クラス全体での振り返りを行うことで多くの気づきを得ていたが、保育者役を経験することでしか実感

（痛感）できない気づきがあった。それは、特に事前に準備や練習をすることの重要性や、子どもの姿を予想・理解することの大切さへの気づきであった。多くの学生が「手遊びくらい（自分の知っている・できる手遊びを選択すれば）、事前に準備・練習をしなくても（指導案を書かなくても）学生相手なら問題なくできるだろう」というような思いをもっていた。しかし、実際に保育者役となって、多くの子ども役の学生に見つめられて緊張したり、予想外の反応を返されて戸惑ったりして、簡単な手遊びの動作でさえ忘れたり、歌詞を飛ばしたり、テンポが速くなってしまったりという失敗をしていた。この失敗経験が、もっと事前に準備・練習しなければ、もっと子どもの姿を予想・理解しなければという学生の気づきを高めたものと考える。また、模擬保育中は失敗したと感じていなかったことも、模擬保育後に保育者役をしていた自分の姿や表情、動作、声などを動画で確認することによって多くの気づきがプラスアルファされていた。動画視聴による振り返り効果は大きかったと言える。

学生全員が保育者役を経験できたのは、今回、短時間で行える「手遊び」を模擬保育として取り上げたことが大きい。一般的な模擬保育では、なかなか全員に一人ずつ保育者役を経験させることはできない。「手遊び」に特化した模擬保育だったからこそ、それが可能となった。しかし、ただ「手遊び」を人前で順番に発表していくだけでは、このような豊かな気づき生まれなかったと考える。手遊びを行う対象年齢、場面、子どもの経験等のシチュエーション・課題を工夫し、目の前の人（学生）を本当の子どもだと思って学生が実践したことで、「保育を構想する力」の基礎、「振り返りの視点」がいくらかでも育まれたものと考える。

全員が保育者役を経験することで、多くの学生が失敗体験をしたと思われるが、短時間で済む「手遊び模擬保育」では自信喪失度は小さく、むしろ、すぐにやってくる次の保育者役への意欲を高めている様子が見られた。

初めて学生が保育者役を経験する模擬保育課題に「手遊び模擬保育」は選択肢の一つになると考える。今後は、さらにその後のセカンドステップ、サードステップの課題について考えていきたい。

引用文献

1)田爪宏二・小泉裕子 2006 保育者志望学生の「保育者アイデンティティ」確立に関する検討:模擬保育の実践を通して 鎌倉女子大学研究紀要第 13 号 pp.27-38
2)久富陽子・須藤みぎわ 2022 保育内容表現の指導法における「模擬保育」の試み 大妻女子大学家政系研究紀要第 58 号 pp.99-109
3)阿部アサミ 2016 保育者養成校における実習に関する研究―模擬保育の意義に着目して― 白鴎大学教育学部論集第 10 号（1)pp. 263-276
4)上月智晴 2019 保育内容総論における模擬保育と学生の学び 京都女子大学教職支援センター研究紀要第 1 号 pp. 15-27
5)吉田愛子・奥田恵子 2008 保育教材としての「手遊び」に関する一考察岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要第 40 号 pp. 37-47
6)永津利衣 2021 手遊びの実際と課題―保育実習後のアンケート調査から― 拓殖大学北海道短期大学研究紀要第 1 号 pp.53-61
7)岩田遵子・小川博久 2015 近代教育制度における教職実践の一方向性克服の試み:「遊び保育」における手遊び実践の意義 東京都市大学人間科学部紀要第 6 号 pp. 11-33
8)高原典子 2008 手あそびについての一考察 小田原女子短期大学研究紀要第 38 号 pp.126-140
9)今由佳里、尾辻菜摘子 2021 幼稚園における手遊び歌に関する実践的研究－「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」領域との関連－鹿児島大学教育学部研究紀要第 72 号 pp.29-48